



明治法律学校卒業記念写真（4列目・左から5人目が山崎。1901年）

まえがき

「奇文」という言葉はおそらく辞書にはない。しかし、「奇人」山崎今朝弥の文章は「奇文」としか表現のしようがないものがある。山崎の「奇人」性や「奇文」を好む人は、彼の「奇文」や「奇行」のなかに、縛られた日常性からの自由をみているのである。「奇人」になるためには、もちろん「反骨」の精神をもつ勇気が必要とされるが、それ以上に生まれもった性格がものをいう。

山崎は『弁護士大安売』に収録されている「自分の性質を白状す」という文章のなかで次のように書いている。いま文意をわかりやすくするために括弧で補えば、「僕の性質は僕にも解からぬ。間違つた（こと）の無い処で、僕は問題となり、問題を起し、「そこから判断すれば僕は」誤解を招く事を好むらしい」と。またいう、「僕の親類は親兄弟いとこ、はとこに至る迄一貫して皆所謂昔時の諧謔性に属している」と。つまり、親族には皮肉やユーモアを好む人物が多かった。山崎の「奇行」は人生を護るための先祖からの技法であり、そして「奇文」は計算と推敲によって生み出された文章上の技法であった。身分や特権、権力や権威、富と勲功、それらすべて

を否定し、弱者の人権、思想・言論を護るためのレトリックが山崎の「奇文」の正体であったといえる。もちろん、結果として権力による弾圧から身を護るための柔らかな鎧となった。

ところで、山崎今朝弥の書き遣した文章のなかには数限りない話題があり、テーマがある。それらは、決定されている現実を一義的に説明するのではなく、現実を複数に分解して、その多様な様相を示してくれる不可思議な意味の世界である。つまり、文章のなかに想像力を駆り立てるエネルギーが存在するのである。生涯の友人であった新居格は「奇想」という言葉を使っているが、「奇想」があつて初めて「奇文」が生まれるのである。この「奇想」は、自由や平等、正義や人権などの普遍主義的原理にもとづいているが、決してそれらから直線的に生み出されるものではない。いわば言葉の意味を反転させたところから迂回されてつくり出されるのである。したがつて、山崎の文章を読み解くためには、ある種の技術が必要とされる。本書は、そのための実習の試みである。

さて、本書のように、特定の人物の研究を行うことは、もちろんその人物の事績や業績を調査し、評価することである。評価においては必ずしも肯定的な評価がなされるだけではなく、否定的な評価もある。そのようにして検証しながら、教訓を得ることが研究の意味であろう。しかし、山崎今朝弥に関して、そのような手法がどこまで妥当するのだろうか。私には、ほとんど不可能であるように思える。その理由はどこにあるのか。答えは簡単である。山崎今朝弥という人物は研究という手法に馴染まないし、それを叙述する方法を見つけることも困難であるという

ことである。二百頁を少し超える、山崎今朝弥についてのこれまで唯一の、卓越した評伝『山崎今朝弥』を書いた森長英三郎の「後記」はそのことを物語っている。森長は山崎の「自伝」を真似て、次のような自己紹介文を書いた。「一九〇六年、幸徳秋水、山崎今朝弥の在米中に日本に生まれる。久しく消息不明であったが、一九三六年弁護士となっていた。その後有名、無名の大小各種の事件を担当する幸運にめぐまれたが、いまだ食えないとのこと」と。生前の森長に私淑してきた私としては、こういう文章を書きたくなつた森長の気持ちはよくわかるが、山崎のようにはなれなかつた森長の悲しい気持ちも理解できる。それほど、山崎今朝弥という人物を研究し、論じることが難しいのである。しかし、私たちは山崎今朝弥の精神を学ぶことはできるし、自分なりのスタイルで山崎今朝弥を生きることができない。そのために山崎今朝弥の足跡を調査し、形にすることが本書のささやかな目標であつた。そんなことを考えて、本書を読んでいただければ幸いである。

二〇一八年八月

執筆者を代表して 山泉 進

まえがき

iii

I

奇人と郷土

—— 弁護士になるまで

〈扉引用文〉「自伝」〔『弁護士大安売』より〕

1 郷土と家族

4

2 明治法律学校と渡米

42

3 アメリカ時代——ダウンセラ大学とケロッグ博士

90

II

叛逆と人権

—— 弁護士・社会活動

〈扉引用文〉「地震・流言・火事・暴徒」〔『地震・憲兵・火事・巡査』より〕

4 社会派弁護士としての活動

130

5 大審院における言論擁護の弁論

171

III

道楽と抵抗

——雑誌・出版活動

〈扉引用文〉「発刊之辞」(四六版『解放』創刊号より)

6 雑誌道楽の世界

194

(付論)『法律文学』の発見

221

7 「解放群書」の謎解き

239

8 「幸徳伝次郎全集」の探索

270

IV

諧謔と自由

——文献・年譜

〈扉引用文〉「出版と法律と良書」(私家版『解放』一九三二年二月号より)

9 奇書と文献の案内

304

10 山崎今朝弥年譜

329

あとがき

342

I

奇人と郷土——弁護士になるまで

君性は山崎、名は今朝弥。明治十年逆賊西郷隆盛の兵を西南に拏ぐるや、君之に応じて直ちに信州諏訪に生る。明科を距る僅に八里、実に清和源氏第百八代の孫なり。幼にして既に神童、餓鬼大将より腕白太政大臣に累進し、大に世に憚らる。人民と伍して芋を掘り。車を押し、辛酸嘗め尽す。傍ら経済の学を明治大学に修め、大に得る処あり。天下嘱望す。不幸、中途試験に合格し官吏となる。久しく海外に遊び、ベースメント・ユニバシチーを出で、欧米各国色々博士に任じ、特に米国伯爵を授けらる。誠に稀代の豪傑たり。明治四十年春二月、勢ひに乗じて錦衣帰朝、一躍直ちに天下の平弁護士となる。君資性豪放細心、頗る理財に富み、財産合計百万弗と号す。即ち業を東京に興し、忽ち田舎に逃亡し、転戦三年、甲信を徇へ、各地を荒し、再び東京に凱旋し、爾来頻りに振はず、天下泰平会、帝国言訳商会、私立天理裁判所、軽便代議士顧問所、各種演説引受所等は皆君の発明経営する所たり。

英独仏羅典語クラシカルに通ず

法学博士

未婚者

医学博士

伯爵

山崎今朝弥

哲学博士

未婚者

其他色々

財産合計百万弗ドル有り

「自伝」(「弁護士大安売」より)

1 郷土と家族

山崎今朝弥は、一八七七（明治一〇）年九月一五日、長野県諏訪郡川岸村かわきし一九五番地ノ内一番（大字新倉小字塩坪しおつば、現岡谷市川岸西）に、父勝左衛門（四十二歳）、母よ祢（三十七歳）の三男、八人兄弟の第六子として生まれた。

一八九九年、二二歳で上京して明治法律学校（現明治大学）に入学。一九〇一年、判検事登用第一回試験と弁護士試験に合格し、同年、司法官試補（判事）として甲府区裁判所詰となるが、一カ月余で辞職。一九〇二年に渡米。一九〇七年に帰国し、弁護士登録をして都内に事務所を開設するものの、同年暮れに郷里に引き揚げる。翌一九〇八年、諏訪郡上諏訪町（現諏訪市）で弁護士事務所「山崎博士法務局」を開設。その後、山梨県甲府市に移転し、「甲府法務局 平民法律事務所」を経て一九一〇年に再度上京。帰郷中に青森県弘前市生まれの山形さいと結婚した。一九四五年から一九四六年にかけて家族で川岸村に疎開、地元のアナキストらと交わった。権力に抗し、自由主義、社会主義を擁護する人権派弁護士としての生涯を貫いた。一九五四年七月二

九日、七七歳で死去。戦前自らが奔走して東京都港区の青山墓地（現青山霊園）に建立した「解放運動無名戦士之墓」に葬られた。

山崎（以下、単に山崎と記した場合には山崎今朝弥を指す）はその思考や特異な行動様式から、しばしば「奇人」と称された。山崎の遠戚に当たる林尚孝氏^①から、奇人と呼ばれるような精神性を育む土壌と、それを受け入れる風土は諏訪固有の、いわゆる「諏訪人氣質」ではないかとの示唆をいただいた。そこで、山崎の生い立ち、家系、生家の経済状況、上諏訪での弁護士時代、郷里での疎開中の動向をたどり、併せて、妻さいと家族についてみておくことにする。

この調査は、山崎と妻さいの出自に立ち入るもので、ご遺族及び血縁の方々からの戸籍の提供や聞き取りなど、ご高配とご協力がなければ実現できなかった。お名前を記して感謝を申し上げます。次第である。山崎東吉氏（山崎長男堅吉次男^②）、故山崎弘子氏（山崎二女^③）、故山崎勝氏（山崎生家^④）、山崎米子氏（勝氏妹）、故山崎せき氏（山崎家本家^⑤）、林尚孝氏、長島正和氏（遠戚^⑥）、山形明氏（さい甥^⑦）などの方々である。

一 家系

川岸村は、一八七四年に諏訪郡新倉村、三沢村、駒沢村、鮎沢村、橋原村の六か村が合併して成立した。諏訪郡の西のはずれに位置し、北を現在の塩尻市、南西を現在の上伊那郡辰野町と接

している。村名が示すように、諏訪湖を水源として南西に下る天竜川の両岸の、南北から山地が迫る細長く狭い河岸台地にある。静かな農村地帯で、山崎の家も代々の農家であった。編入されて岡谷市となるのは、一九五五（昭和三〇）年のことである。

山崎が生まれた年の村の戸数は四百五十戸、人口は二二二〇名で、塩坪はその中でも最も小さい二十戸ほどの部落であった。

一族の系統を系図（図1）と共に簡単に記す。氏名に付した（ ）は屋号である。

父勝左衛門は、天保七（一八三六）年に山崎忠五郎（カネタマ）の次男に生まれ、同じ部落で近隣の山崎新之丞（ヤマヨ）の養嗣子となった。忠五郎の妻せきは、新之丞の三女である。生家の「ヤマヨ」は、長兄米三郎、同長男勝邦、同長男勝と引き継がれ、建て替えられてはいるが現在も同じ場所にある。三女かつは、勝右衛門の長男鐵之助に嫁いだ。勝右衛門三男辰彌の三女せきは、勝右衛門長男鐵之助の婿養子進の養女となり、「カネタマ」の家に入った。

このように入り組んだ関係になっているのは、財産が分散しないようにとの配慮もあってのことである。後で述べるように、大正初期に、同族五軒又は六軒で養蚕業の結社を組織していることから、同族の結束意識の固さが分かる。

父勝左衛門の人柄については、その死に際して堺利彦が貝塚澁六のペンネームで、「奇人の親だから自然に子の遺伝を受けて矢張り奇人だった」と、戯文調の追悼文を寄せている。日頃山崎から聞かされていた話に茶々を入れたものであろう。この文章には山崎の付記があり、思い切り

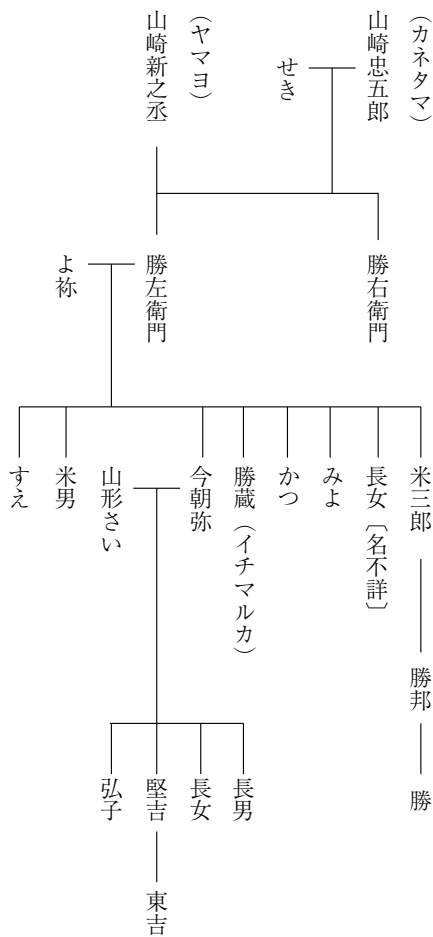


図1 山崎家家系図

や極まりがよく、喧嘩が嫌いで、なりふり構わない人であったことや、沢山ある逸話の中で一番感心したことは諦めがよいことで、長兄が製糸業を始めて如何なる大失敗をしても愚痴一つこぼさず、自分はせつせと野菜畑を耕していたことであると記している。母親のよ祢についても山崎は、人の家に行くとき必ず履物を忘れてくるような人で、こうした欠点は、「僕から其儘遺伝した如くで思いたすだに嫌な気持になる」と、堺同様の表現で書いている。¹⁰⁾

「奇人」は山崎の生涯の代名詞のようなものであったが、前坂俊之『ニッポン奇人伝』（社会思

あとがき

権利と自由の普及を建学理念として、一八八一（明治一四）年に設立された明治法律学校（明治大学）は数多くの人権派弁護士を生み出してきた。その代表的人物が布施辰治と山崎今朝弥である。布施辰治は、植民地下の朝鮮や台湾において独立運動や農民運動の裁判の弁護士として活動したことが評価されて、二〇〇四年一〇月に韓国政府から日本人として初めて「建国勲章」を授与された。翌年一月、その記念シンポジウムと写真展が明治大学（納谷廣美学長・明治大学法学部（土屋恵一郎法学部長）の共催で開催された。それが契機となつて、山崎今朝弥遺族と連絡が取れ、関係資料の寄贈を受けることができた。これらのことがきっかけになり、明治大学史料センターのなかに人権派弁護士研究会を立ち上げ、共同調査・研究を行ってきた。それからもう一〇年以上の時が経過した。その時々々の成果は、『大学史紀要』に発表してきている（「9 奇書と文献の案内」（三〇四頁）参照）。布施辰治については、すでに『布施辰治研究』（山泉進・村上博編、日本経済評論社、二〇一〇年）と『布施辰治著作集』（明治大学史料センター編、全一六

卷＋別巻一、ゆまに書房、二〇〇七―二〇〇八年）を出版してきている。

山崎今朝弥についての先駆的な伝記研究は、森長英三郎『山崎今朝弥——ある社会主義弁護士の人間像』（紀伊國屋書店、一九七二年）が唯一のものであるが、本書では、共同調査と研究の利点を活かして、明治大学（明治法律学校）との関係、また「雑誌道楽者」としての側面を浮かび上がらせた。人権派弁護士・山崎今朝弥を明治大学の卒業生の一人としてとらえ、山崎を通して明治大学の歴史と個性を理解していただきたいということ、また宮武外骨とは違った言論と出版の擁護者としての「雑誌道楽者」山崎の顔を再発見していただきたいということ、このことが本書刊行の趣旨である。

明治大学大学史資料センターは、研究叢書として『尾佐竹猛研究』（二〇〇七年）、『布施辰治研究』（二〇一〇年）、『三木武夫研究』（二〇一一年）、『木村礎研究——戦後歴史学への挑戦』（二〇一四年）を日本経済評論社から出版してきた。今回は、諸事情から長年の友人である森下紀夫氏が社長を務める論創社から刊行することになった。これを機会に、体裁も全面的に改めて馴染みやすいものにしたつもりである。学術書についての出版状況が厳しいなかで、勇気をもって本書の刊行に踏み切ってくれた森下氏と、担当編集者の永井佳乃さんに、改めてお礼を申し上げたい。

山泉 進

❖ 編著者紹介

山泉 進 (やまいずみ・すすむ)

1947年高知県四万十市生まれ。明治大学名誉教授(学長特任補佐)。明治大学史資料センター前所長。著書に、『平民社の時代——非戦の源流』(論創社、2003年)、『帝国主義』(幸徳秋水著、校注・解説、岩波文庫、2004年)、『布施辰治研究』(共編、日本経済評論社、2010年)、『大杉栄全集』(編集代表、ぱる出版、2014~2016年)、『明治大学の歴史』(共著、2017年)ほか。

村上一博 (むらかみ・かずひろ)

1956年京都市生まれ。明治大学法学部教授、法学部長。明治大学史資料センター所長。著書に、『明治離婚裁判史論』(法律文化社、1994年)、『日本近代婚姻法史論』(法律文化社、2003年)、『磯部四郎研究』(共編、信山社、2007年)、『岸本辰雄論文選集』(日本経済評論社、2008年)、『宮城浩蔵論文選集』(明治大学出版会、2015年)、『新版 史料で読む日本法史』(共編、法律文化社、2016年)ほか。

❖ 執筆者一覧 (五十音順。●以降は執筆担当箇所)

阿部裕樹 (あべ・ゆうき) ————— ● 9 (共著)

明治大学史資料センター

飯澤文夫 (いざわ・ふみお) ————— ● 1, 6 (付論を除く), 7 (表1), 10

明治大学史資料センター研究調査員

中村正也 (なかむら・せいや) ————— ● 2

明治大学史資料センター研究調査員

村上一博 ————— ● 5

編著者紹介欄参照

山泉 進 ————— ● 3, 4, 6 (付論), 7 (表1を除く), 8, 9 (共著)

編著者紹介欄参照

❖監修者紹介❖

明治大学史資料センター

2003（平成15）年4月設置。1986～94年『明治大学百年史』の編纂にあたり蓄積された資料の活用と、大学の歴史全般にわたる調査・研究・資料収集・保存及び公開を目的としている。

現在、センター内に創立者研究会、人権派弁護士研究会、アジア留学生研究会等を置き研究活動に従事すると同時に、総合講座「明治大学の歴史」の運営にあっている。機関誌『大学史紀要』を刊行、『私学の誕生』（2015年）、『明治大学の歴史』（2017年）等を出版している。

山崎今朝弥 弁護士にして雑誌道楽

2018年10月17日 初版第一刷印刷

2018年10月23日 初版第一刷発行

編 著 者 山泉 進・村上一博

監 修 者 明治大学史資料センター

発 行 者 森下紀夫

発 行 所 論 創 社

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装 幀 宗利淳一

組 版 永井佳乃・フレックスアート

印刷・製本 中央精版印刷

©Yamaizumi Susumu, Murakami Kazuhiro 2018 Printed in Japan

ISBN978-4-8460-1753-8

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。